

昭和五十九年七月二十二日史跡めぐり資料

第一三三回

史跡めぐり資料 (千葉市内)

千葉寺
猪鼻城跡
郷土資料館
妙見菩薩詞跡
七天王塚
大日寺
来迎寺

越谷市郷土研究会

理事 中村忠夫

第一三三回史跡めぐり案内

とき 昭和五十九年七月二十二日(日)

集合 南越谷駅前 午前八時 ○分集合
午前八時三十八分発(西船橋行)

行先 南越谷 1 西船橋 1 千葉駅下車

コース バス 1 千葉寺 1 猪鼻城跡 1 文化会館 1
郷土資料館 1 妙見菩薩祠跡 1 天王塚 1
バス 1 大日寺 1 来迎寺(千葉家累代の墓)

帰路 西千葉 1 西船橋 1 南越谷 1 1

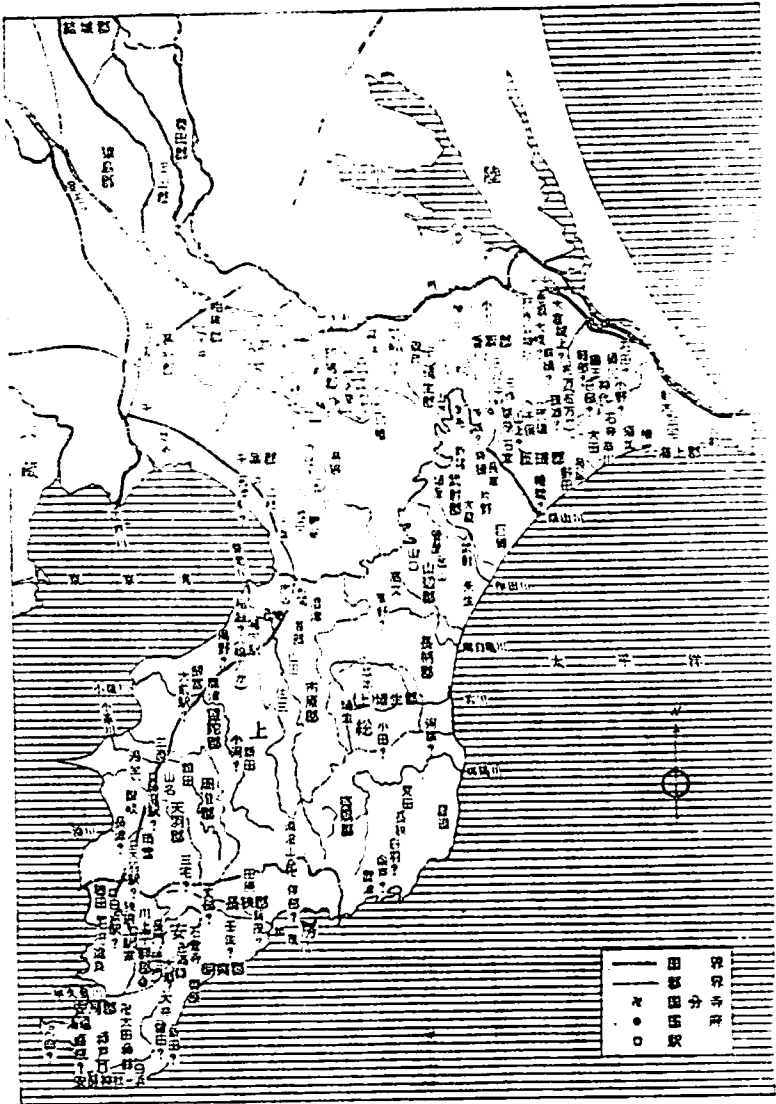
案内者 中村 忠 夫 理事 ☎ 6213429

会費 3,000円(交通・資料・入園・保険料その他)
但し、昼食は各自持上(食堂利用)

申込 葉書に住所・氏名・性別・電話番号記入の上市立図書館管理係
まで(七月十九日まで必着のこと)

越谷市東越谷 41911
市立図書館内

越谷市郷土研究会
☎ 6512655



古代要図

千葉市

千葉市

大正十年一月市制施行、人口七十万余人、交通は総武本線千葉（内房・外房・成田線連絡）・西千葉・稲毛・新検見川・幕張、外房線本千葉・蘇我・鎌取・誉田・土気、内房線浜野、成田線東千葉・都賀、京成鉄道千葉・その他の駅がある。

地勢

県の西北部、東京湾岸に位し、県庁所在都市、南は市原市、東は山武郡大網・白里町・東金市、北東は印旛郡八街・四街道町・佐倉市、北西は八千代・習志野の両市に境を接し、南西部は東京湾に面している。

市制

大正十年一月、旧千葉町が市制を施行して千葉市となり、昭和十二年に検見川町・蘇我町・都賀町・都村を、同十九年に千城村を、同二十九年に積橋村・幕張町を、同三十年に生浜町・椎名村・洋田村を、同三十八年に泉町を、同四十四年七月には土気町をと隣接町村を次々に編入して市域を拡大して、今日に及んでいる。

市域内には、海拔三〇〜五〇mのなだらかな丘陵性台地が広く分布するが、海岸沿いと中央部を西流する都川沿岸には、平坦な沖積低地が開けている。都川が東京湾に注ぐ附近に、千葉市街が形成されている。

原 始

開発の歴史は古く、市内各所に散在する加尊利貝塚や大尊寺古墳といった、多くの遺跡がそれを物語っている。

平安時代

平安時代末期には、天慶の乱（九三五〜四〇）を契機

に、東国に勢力を扶植した、関東八平氏の筆頭、千葉常重は、猪鼻丘陵の突端に千葉城を構築して居城した。この時城下に営まれた、家臣団の居住した町屋が現在の中心市街地域で、千葉市の都市的起源とされている。

室町時代

以来城下町は、千葉氏の本拠として繁栄したか、十三代千葉介胤直の時、康正元年（一四五五）、族の内紛かわ兵火にあつて焼失、一寒村に衰退した。

近 世

徳川の世に変はると、佐倉・東金・大多喜・館山・天津方面への街道の宿場町として復活した。江戸中期には佐倉藩十萬石の年貢米と江戸送りの領内物資の積出し港となり、港町としての機能をも兼ね備えるに至つた。

現 代

明治に入つて、同六年県庁が置かれ、同二十七年には東京本所（錦糸町駅）と市川・千葉・佐倉とを結ぶ鉄道が開通し、東京との結び付きを深め商業都市として発展する一方、陸軍歩兵学校など軍関係の施設が多く設置され、軍都としても栄えた。

戦 後

消費商業そして軍都としての都市から、生産都市への脱皮が計られ、現在東京湾岸の埋立地には、昭和二十五年に誘地された川崎製鉄所を始め次々に進出して来た東京電力火力発電所・昭和電工・旭ガラス・富士電機・丸善石油等が煙突を林立させている。

市原市と共に大工場群から排出される煤煙による公害の問題が深刻化している。

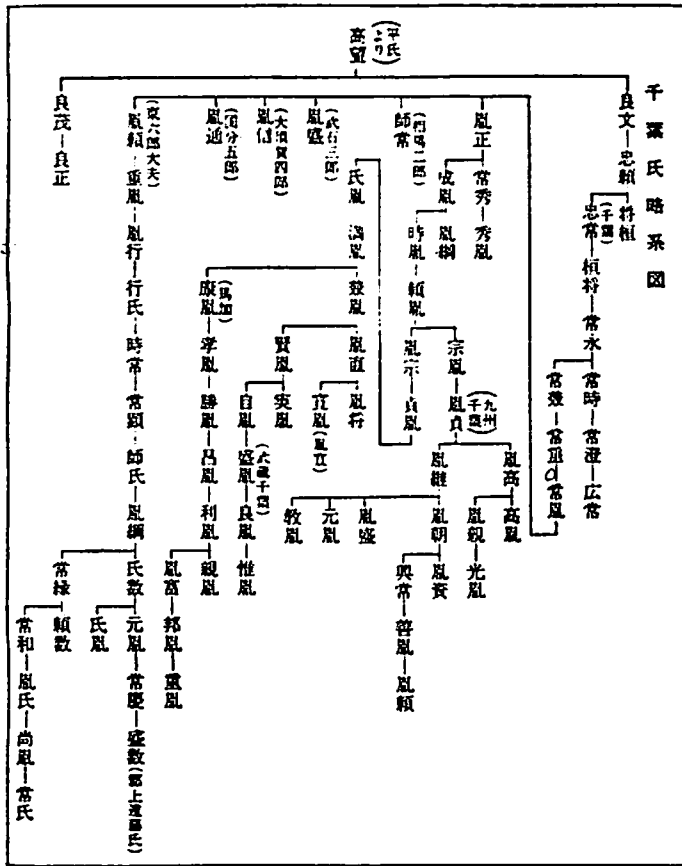
和三十三年には重要港湾の、同四十年には特定重要港湾

の指定を受けた。横浜・東京・神戸港と共に、我が国多数の国際貿易港となっている。

農業

農業は、市郊外の台地の畑で落花生・野菜栽培、丘陵地の狭間に散在する谷田での稲作が行なわれていたが、宅地化の波に洗はれ、農地の宅地化への転用が激増して農家は減小の一途をたどっている。特に市域西北部と東部の宅地化が著しく、花見川・さつきが丘・こてはし台・小倉台・千城台・大宮台といった大団地が造成されている。

見どころ



千葉氏略系図

▼千葉城跡 (猪鼻公園)



千葉城跡 (猪鼻公園)

見どころとしては、猪鼻公園・千葉市郷土館・大蔵寺・千葉寺・千葉神社・七天王塚・来迎寺・大日寺・昆陽神社等がある

千葉氏の出自と興亡

平将門と忠常

将門の乱

平安時代中期の最大の事件で、京都貴族に重大な警告を与えたのは、東國の一角より起きた平将門の乱である（九三五―九四〇）

将門は、桓武天皇の曾孫、高望王の孫で下総国豊田郡に根拠を構え、毛野（鬼怒）利根両水系の乱流する関東平野の中央農村を背景として、英雄的な活躍をして、京都中心の現体勢に反抗して関東に新王国を打立て様として、はかなく消えて行つた。

承平五年（九三五） 将門の父は高望の子良将で、奥陸将軍として奥陸に有つたが、病にて没した。将門は長じて都に上り衛士となり任官を志ざした。武功を挙げ昇進したが、留守の間に伯父良兼の為に父の遺領を押領された。これが為に不和となるが、又宗家国香の長子貞盛に恋人を取られた事から、伯父国香や源護の子等と戦いこれ等を敗死させたので、この地方の平氏一門を敵に廻してしまつた。

武蔵権守興世王と介源経基とが武蔵足立郡前司武芝との間で争が有り、その調停役として将門が当つたが失敗した。経基は京都に将門を上訴した。

天慶二年（九三九）将門は国司より追捕を被つた為、租税を納めず、常陸の土豪藤原玄明を批護してこれを助けて同十一月常陸国府を攻め、政庁を焼き、更にエスカレートして関八州の国府を虜掠し、その鍵と印を押取した。その後興世王と結び下野・上野を征した時に、八幡天菩薩の託宣を受けて新皇と称し、上総石井郷（岩井市）に皇城を經營した。翌天慶三年（九四〇）二月、国香

の子貞盛や下野の土豪藤原秀郷と戦つて敗れ、幸島郡（狼島郡）の北山（岩井市北原か？）で戦死し、興世王も上総で藤原公雅に誅せられた。将門に味方した者供も一様に罰せられて、天下を動揺させた大乱も治まつた。

七天王塚

千葉氏の居館猪鼻台、千葉大学医学部の敷地内の一角に七天王を祀り七天王塚（親天王1・子天王6）といつて七つの森が、北斗七星の様に点在する。

千葉氏は妙見神を氏神とし七曜・九曜といつた星辰紋は弓箭を保護する仏天として信仰し、家紋とした。将門と戦つた時、妙見菩薩の加護により勝利する事が出来たという軍の神である。

七天王塚は、将門にまつはる七人の影武者の伝説を伝えている塚である。

武蔵常の地には将門の同族の武將が多く、将門を攻めているので、皆一様に将門の怨霊に恐れを成たものと思はれ、七天王塚もその将門の怨霊を鎮めん為に、良文系の子孫が、之を祭祠したものである。

忠常の乱

万寿四年（一〇二七）長元四年（一〇三二）の五年間、安房・上総・下総が亡国の様と荒廃した大乱が起つた。下総の住人、前上総介平忠常の乱である。

忠常は、高望の曾孫で、父祖代々東國を根拠地として勢威を振う、忠常も又上総介・武蔵押領使（将門の乱後の駐留軍）としての職にあつた。

摂関政治で榮華を極めた藤原道長が万寿四年の暮病没したのを機に、忠常は朝廷に対し公然と反乱を起した。長元元年（一〇二八）六月、檢非違使平直方・中原成道に對し命じて追討軍を進発させた。

忠常は、上総の国府を占領し平為政の妻子を抑留、安

房国府を焼き安房国守維忠を焼死させた。

長元二年(一〇二九)二月、朝廷では新ためて平直方を追討使に任じ、東海道・東山道・北陸三道に令して忠常追討を命じたが、たいした進展が見られなかつた。

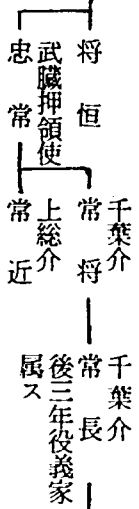
長元三年三月安房国守藤原光業は忠常に攻められ、国印を棄て、安房を出奔京都に逃げ帰つた。朝廷では再び後任に平政輔を安房守に任じたが、遂に安房国に着任出来なかつた。

平直方は、追討使を免ぜられ後任に甲斐守源頼信に追討使を命じ、坂東中の諸国司に勅した。長元四年(一〇三一)四月、忠常は頼信に降参した。忠常は頼信に連行されて上京する途中、美濃国で発病、同国で没した。頼信は首を斬り京都で鼻首の刑に処された。忠常の子常将・常近は処分されず罪を許された後、千葉介・上総介となり繁栄する。頼信は功により鎮守府將軍に任ぜられた。これ以後源氏は関東武士の束ねとして棟領と目され、千葉氏始め坂東八平氏その他の諸土豪も一様に源氏に従属する事となる。

忠常の居城は「千葉大系図」によると、上総国大椎城であつたが、後香取郡東庄町大友城に移り、忠常の孫常兼の時再び大椎城を修復して移つたとしている。

平姓

良文 | 忠 頼



千葉介 常 兼	千葉城主 常 重	千葉介守護 常 胤	千葉介守護 常 胤	千葉介 常 胤
後三年役出陣	太治元月築城	義朝 属ス	奥州ノ役ニ功	和田合戦功有
頼朝挙兵ニ功				

千葉介常胤

常胤の父常重の代に猪鼻台に築城して移り千葉城主となり、相馬御厨を伊勢皇太神宮に寄進している。

常胤は、保元の乱の時源義朝に属し院の御所の夜討に参加し功をたて、いる。平治の乱には、源家と興亡を共にしている。

頼朝は、伊豆に兵を挙げ平家の目代を討取り、石橋山で大庭景親等と戦い、敗れて小舟で真鶴岬より安房に逃れ再起を計つた。治承四年(一一八〇)八月二十九日の事である。

頼朝は、先づ安西三郎景益に在庁官人を率いて参上させ、又平家の輩を捕える様命じ、和田義盛を上総介平広常へ、安達藤九郎盛長を千葉介常胤に使させた。頼朝は広常をたよつて上陸地狹島より長狭郡に出動止宿した。夜長狭六郎常伴に夜襲を掛けられたが、逆に打破られた。頼朝は安西景益の館に引返し洲崎宮に参拝して願文を奉納している。九月六日和田義盛が広常の返事を持つて来、「千葉介常胤と談合の上参上する」というすつきりしない返事であつた。(後頼朝の命にて誅される遠因となつた)。一方安達盛長は常胤の返事を持つて戻り「源家再興の志を承り、感涙眼に溢して言語に及ばず、頼朝公の挙兵に際し、一番に御召に預り我が家の面目」と答

盛長に対し酒盃を賜つたと。
頼朝は、三〇〇余騎を率いて十三日安房国を出発、十七日下総国府にて千葉介常胤と来会した。頼朝は常胤を即座右に招いて「我が第二の父とする」と言つて喜んだという。

上総介広常は二日後れて、十九日隅田川辺に到着、頼朝の陣に参じ、二万の軍を率いて之に従服した。始め我が主たる人物に非ざれば直ちに主首を挙げて平家に献ずべく心得て参上の所、案ずるより心に叶う大将と見て感服して従つたという。

千葉・上総・安房の諸將の他に葛西・豊島・江戸・河越・畠山・野与等武蔵の平氏一門も皆従い、その勢十方を以て鎌倉入りを果した。千葉常胤は、かくて鎌倉府草創期に重要な地位を占めるに至った。

上総介広常

上総介広常は、頼朝挙兵以来の主従関係ではあつたが始めの参上の時より頼朝の疑心を買ひ、又広常の言動は不遜で頼朝の不快を招き、遂に疑心を招き、寿永二年(一一八三)十二月鎌倉の菅中で誅せられた。後頼朝は誤りであつた事が解り後悔したといはれる。

広常も常胤も共に上下総の権介で、平良文系の一族で共に名門である。

頼朝は、正治元年(一一九九)正月十三日五十三歳で没し、その二年後、建仁元年(正治三年一二〇一)三月二十五日、常胤八十四歳で世を去つた。墓は、千葉市轟町大日寺境内の五輪塔群内にあると伝えられている。

千葉氏は、常胤の時から下総守の守護となり、子孫が守護を世襲したので一門は北総一帯に勢力を振つた。

忠常の子は男子七人おり、一人は僧となり、他は下総の各地に分播した。

(7) 近江国円城寺(三井寺)にて律浄日胤と称し、後源頼政に従ひ奈良にて討死す。

(1) 嫡男太郎胤正、千葉介となり千葉宗家を継ぐ。

(2) 次郎師常は、下総国相馬郡の郡主となり、奥州征伐の功により、陸奥国行方郡に新恩地を得、子孫二流に分れ元享三年(一一三三)、重胤の時陸奥行方郡太日村に移住した。

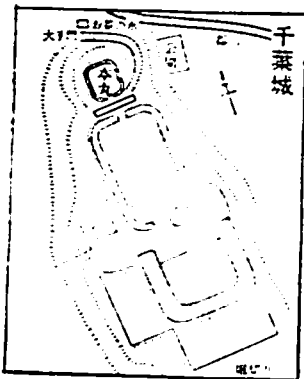
(3) 三郎胤盛は、下総国千葉郡武石郷(幕張町)に、他に奥州宇多・伊具・亘理三郡の地を領した。

(4) 四郎胤信は、下総国香取郡大釜郷(ナガノ)を領し他に奥州岩城郡を領す。又和田合戦の功により、甲斐国井上荘を賜はる。

(5) 五郎胤通は、下総国葛飾郡国分郷(市川市国分)を領し、同国香取郡矢作にも所領有り、後代々矢作城を居城とす、他に奥州・遠江・三河にも所領有り、子孫は国分氏を称した。

(6) 六郎大夫胤頼は、下総国香取郡東荘三十三郷を領し、後三崎荘五十五郷も父常胤より与えられた。他に陸奥・美濃にも所領有り、東氏の主城は、森山城(香取郡小見川町岡飯田)である。分流に三崎荘海上の中島城主に海上氏を称す。

以上千葉六党と言ひ、その勢威は関東武士の第一人者と目され、「千葉大系図」中にあるその枝葉は、百六十一五流を数える事が出来る程に分派してそれぞれに繁栄している。



千葉城

和田の合戦

建保元和(一二一三)二月、千葉介胤は鎌倉の甘縄郷にて一人の僧を捕えて、北条義時のもとに差出した。之が和田一族の滅亡の発端であつた。

和田義盛の甥胤長以下義盛の子供等一族が一味として逮捕されたが、当時上総国伊北荘(大多喜城)にいた義盛は変を聞いて鎌倉御所に参上、將軍に調したので義盛の功に免じて、子義直・義重は許されたが、主謀者と目された胤長は流罪となつた。

同五月、三浦党一族で和田義直・義重には従兄弟に當る三浦義村が突然寝返つて北条義時に応じた為に、かねてから秘密裏に計画されていた義時襲撃が暴露された。義盛の一族一五〇騎は、最速之までと、寡勢にて幕府を急襲したが、和田勢力及ばず全滅した。千葉成胤はこの合戦で幕府側に立ち、精兵を相い具して活動している。

承久の変

承久三年(一二二一)五月、幕府打倒の計画が進められ、後鳥羽上皇が北条義時追討の院宜を下した。この時計画に参加した三浦胤義は、兄義村に書を送り宮方に應じて、義時を誅する様勧めた。三浦義村はこの書状を義時に示したので、後鳥羽上皇の計画が発露した。

北条政子の有名な“激”が発せられたのはこの時である。武蔵の武士は雲霞の如く京へ進撃、宇治川の先陣争い等戦記を賑している。かくて院側はもろくも敗北に終り、上皇は配流の身となり、参加者は皆断罪された。

宝治の合戦

寛元二年(一二四四)五月、幕府は六歳の藤原頼嗣を將軍とする。頼嗣の父頼経は二十六歳で髪を断ち、行知と号した為、將軍職を更送された。

同四年(一二四六)四月、北条時頼が執権となつた時北条氏討伐の風評が巷間に飛んだ。主謀者は、北条一門

の朝時の子名越光時や上総権介秀胤(千葉介胤正の次男上総権介常秀の嫡男で)評定衆の一人であつた。

三浦泰村は父義村以来厚恩有る前將軍頼経の更送に同情して、北条氏打倒を策謀した。

宝治元年(一二四七)五月、秘かに安房・上総にある彼の所領地より船で武器を運んで戦鬪の準備を始めた。事前に察知した執権時頼は、六月五日誓書を三浦泰村に送り、その兵を解散させる様申し入れた。

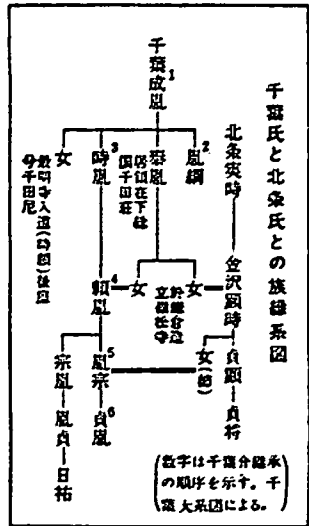
この時三浦氏と対立していた安達景盛の一族が突然泰村を襲つたので、三浦一族はもろくも敗退し、一族とそれの余党五〇〇余人は頼朝の御影堂に追込まれ、自刃して果てた。今頼朝の墓のある裏側に三浦やぐらがある。

この時泰村側に属した千葉氏の一族印東・臼井・大須賀等の武士が戦死したり逮捕されたりした。

この合戦の後、秀胤の遺領は足利左馬頭義氏に与えられ、子息宮内少輔泰氏に伝領されるが、建長三年(一二五一)幕府に無断で入道した為、法に触れ領地召上げられ、埴生荘は、北条実時(金沢氏)に与えられた。その他下河辺荘・下総下方・香取郡東庄等も実時に与えられて、千葉氏所領の分断を計つている。

この様な下総の情勢の為、千田荘の領主は一族保身の為か、頼朝以来の御家人打倒の目標から避る為か、千葉一族泰胤の妹(千田尼)を北条時頼(最明寺入道)の後室とし、一方千田泰胤の娘を金沢実時の嫡子顕時夫人として嫁し、顕時の姉が千葉介胤宗に嫁している。(胤宗は泰胤の弟千葉介時胤の孫)この様に千葉氏は北条氏と因戚関係を結んだ為、比企・畠山・和田・三浦等々頼朝以来の有力御家人が次々に北条氏の陰謀にかゝり滅亡して行く中で、その目標とならずに済んだが、外様の立場で幕府体制の節度に従い鎌倉時代を生き抜いた。

千葉氏と北条氏との族縁系図



(数字は千葉・北条の順序を示す。千葉系図による。)

南北朝時代

後醍醐天皇は朝権の回復を志して倒幕を決意したが、正中の変(一一三二四)の失敗に続いて、元弘元年(一一三三)の計画も事前に事が発覚して失敗に終り、隠岐に流された。元弘の変には、千葉介貞胤・千田太郎・相馬次郎等千葉の武士団は、北条高時配下の征西軍に参加した、天皇を隠岐まで護送する任に当つたのは千葉介貞胤であつた。

元弘三年新田義貞の鎌倉進攻の時、貞胤は下総より出兵、金沢貞将と横浜市鶴見で戦い、金沢六浦より鎌倉に攻め入り、北条氏滅亡戦に功を挙げた。

建武二年(一一三五)七月、北条高時の遺子時行は、信濃に兵を挙げ鎌倉に攻め入つた。尊氏は翌月時行を鎌倉から追い落して、鎌倉を根拠地として、京都に対し反旗を翻した。朝廷では新田義貞に尊氏追討を命じた。

千葉貞胤は当時京都に有つたので新田義貞に属した。一方下総国千田荘では千葉介宗胤の子胤貞が、千田太郎とか千田大隅守と称したが、足利尊氏の親任が厚かつた。為に、千葉氏は南北に分れて同族が戦う様になつた。千田胤貞と千葉介貞胤とは従兄弟同志で、不和となつて内紛が続き、拡大して動乱にまで発展した。

この遠因は、蒙古襲来の当時、宗胤が防備の差九州に長く滞留して下総から離れ、弟胤宗の子貞胤が千葉介を継ぎ、宗胤の子胤貞が本家筋であり一族の長的位置に置かれた事による。

建武二年(一一三五)相馬親胤と千田大隅守胤貞と連合して千葉城を攻め取る。鎌倉では尊氏方が関東の諸將を集めて、義貞軍と箱根に合戦した。千葉貞胤と千田胤貞とは敵味方となり戦つた。

建武三年(一一三六)十月後醍醐天皇は、尊氏との和議成立して京都に還御した。この時義貞は皇太子恒良親王と尊良親王を奉じて北国に下つた。千葉貞胤もこの供奉の将として加わつたが、越前木目峠で風雪の難にあい進退窮つて止むなく、北条の斯波高経の軍に下つた。それ以後千葉貞胤は、足利尊氏方に属したので、北条の千田胤貞との間の和解も成立した。貞胤・胤貞は共に下総に帰国したが、途中建武三年(延元元年一一三六)十一月、千田胤貞は三河国にて四十九歳にて没した。下総国の二分しての動乱は終りを告げた。

室町時代

暦応元年(一一三八)八月、尊氏は將軍となる。やがて尊氏と弟直義と不和となる。尊氏は直義を鎌倉に攻め滅ぼした。関東には直義に心を寄る武將が多くあり、恩宜を感じる者の中には、管領基氏を守り立て、暗に反將軍の動きに出る者もあつた。

関東管領は、基氏一氏満一満兼と続く。満兼の時代、執事上杉朝宗は、上総上杉を本拠とする犬懸上杉氏の総領である。

応永十六年(一四〇九)七月、満兼三十四歳で没したので、満兼の幼時期、御守役であつた朝宗は、上総国長柄山胎藏寺に隠退した。

子持氏が公方となり、山内上杉憲定が管領となる。応永十八年（一四一一）憲定は管領を辞す。犬懸上杉朝宗の子氏憲（後禪秀）が交つて管領となる。山内、犬懸両家は政權争いで鋭く対立する様になる。

憲定の子憲基は、公方持氏を動かさし、持氏は禪秀を阻害する様になる。

応永二十二年（一四一五）四月、持氏と対立した禪秀は、怒つて領国に引揚た、辞職した後に持氏は、ライバルの山内憲基を管領に起要した。

禪秀の乱

京都將軍家でも、義満の没後末子の義嗣は、義持が將軍職を継いだ事に不満を持ち、秘かに鎌倉に使用して、持氏の叔父満隆と禪秀を結託させ（満隆も持氏に不満を持つ）東西相呼応して挙兵しようと持懸た。

持氏の弟で、満隆の養子の持仲を公方とする手筈も決り、同十月二日夜持氏の館を襲つた。持氏は辛くも逃れて、駿河の今川氏を頼つた。

千葉介満胤の子兼胤は鎌倉府に出仕していたが、兼胤の妻は禪秀の娘であつたので、禪秀側に参加した。

千葉氏は、貞胤が観応二年（一三五二）京都で病没、氏胤が千葉介を継ぎ、尊氏の直義追討に参加したが、氏胤は、貞治元年（一三六二）病没、幼児の義胤が家督を継ぎ、一族の大須賀・因分・東・木内等の面々にて、合議制で千葉介を助ける体制で、千葉介の対面 権威を保つとする事に努めたが、千葉氏の実力は弱体化しつゝあつた。

京都將軍家では、禪秀の台頭を恐れて、駿河範政に御教書を授け命じて、持氏を助け禪秀を追討せしめた。禪秀側の諸將は動揺して心変わりして離反したので、孤立した禪秀・満隆等は自殺してこの乱は終つた。持氏は今川の助けを借りて鎌倉に復帰した。

禪秀の乱後

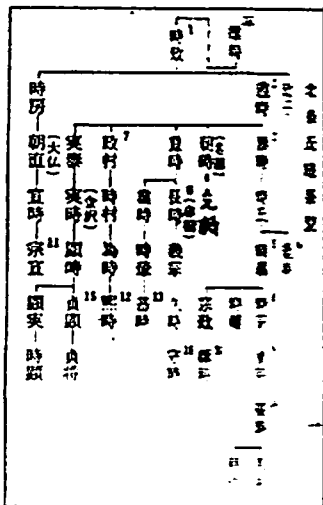
千葉氏は、小山・佐竹と共に、今川氏に備えて相模国足柄方面に出動したが、さしたる動きもせず、急いで持氏に降伏した為に所領は安堵された。

禪秀の乱後、犬懸家の本拠、上総で応永二十五年（一四一八）一揆が起る。上総本一揆という四月に起て、五月末一揆の本拠平三城（市原市根古屋）を陥し懐収つた主謀者は榛谷小太郎重氏で禪秀の老臣であつた。

翌応永二十六年正月、再び本一揆が蜂起、鎌倉府は木内内匠助範壊を將とし追討、三月上総坂水城を攻め、五月重氏は遂に降伏、捕えて鎌倉に送り由比浜で断罪となり、上総における犬懸上杉の勢力は駆逐された。

禪秀の乱後十年の、応永三十二年（一四二五）六月千葉介満胤六十四歳で没し、千葉市轟町来仰寺に葬る。満胤の百ヶ日供養に建てた五輪塔がある。

千葉介は兼胤―胤直と継承する。



北条氏略系図

永享の乱

京都將軍義持は、禪秀の乱には、持氏を支持したが、乱後は將軍義持と公方持氏との対立が深まつた。

正長二年（一四二九）九月、永享と改元したのに、持氏は新年号を用いず、反幕姿勢を露骨に現わした。管領上杉憲実が度々諫止したが聞入れなかつた。享永十年（一四三八）持氏の長子賢王丸の元服に際して、これまで將軍の「偉」の一字を賜わる先例であつたのを無視し、憲実の諫止も聞かず、鶴岡八幡宮社前で勝手に元服式を行い、義久と命名した。管領上杉憲実が病と称して出仕せず、憲実の家宰長尾入道芳伝・扇谷上杉持朝・千葉介胤直等は両者の間の取りなしを計つたが持氏は聞き入れず、憲実を殺害しようと計つたので、憲実は本領上野国臼井城に帰り戦鬪の準備に入つた。

千葉介胤直は、持氏に対し憲実との和睦を進め、奏功したかに見えたが、横槍があり不成功となり、胤直は持氏に見切りを付けて下総に帰り、兵を集めて市川に陣し、憲実側に向つた。

持氏は幕府に対立している間に、人望を失い側近をも敵に廻す事となつた。三浦時高は急に兵を起して鎌倉を急襲し上杉持朝・千葉胤直も激しく攻めたので、持氏は永享十一年（一四三九）二月、鎌倉安永寺で自殺し鎌倉府は滅亡した。

結城合戦

持氏の三人の遺児は、戦火を逃れて、結城氏朝を頼つた。遺子安王丸は関東公方継承者として自任、関東の諸將に御教書を発した。里見・大須賀・宇都宮・小山・下河辺等の諸將は鎌倉の再興を願ひ共鳴して結城城に拠した。下総古河には野田右馬助氏行・関宿城には下河辺一族が拠つて結城氏朝に依じた。

千葉胤直一門は、両総の兵を率い、上杉持朝は安房の

兵を従えて憲実側に向ち結城城を攻めた。嘉吉元年（一四四一）四月、結城城は落城し、古河の野田氏は、船で姿を隠し、関宿城も降参した。遺児安王丸・春王丸・永寿王は捕えられて京へ送られる途中、美濃国垂井にて將軍義持の命により斬られ、永寿王丸のみ幼き為に一命を助けられて、細川持之のもとに預けられた。



千葉家の墓

公方成氏

鎌倉府に主が無く、管領上杉氏のみにては、関東の統率が困難となつて来た。

京都將軍家も、義持―義量―義教―義勝―義政と目まぐるしく変り、義政の代となり、宝徳元年（一四四九）山内・扇谷両上杉・常陸佐竹・下総千葉・下野小山等関東諸將は、こぞつて永寿王丸を鎌倉の主として迎え度いと願ひ出たので、將軍義政は之を許した。十四歳の永寿王丸は、晴れて関東に下向、十一月元服して「成氏」と稱した。管領には憲実の末子憲忠が登用され、里見・千葉・武田の諸氏も鎌倉へ出仕した。



來迎寺五輪塔（千葉介満胤・氏胤等の墓）

成氏の成長

成氏は成長するに従い、亡父持氏の最後を思い、憲実を怨み、引いては上杉一族に対して心良く思わぬ様になつた。成氏は、上杉氏に対抗する結城・千葉・里見等の勢力を近付けて、我が身辺を堅め様と計つた。

之に対し山内上杉の家宰長尾景仲と扇谷上杉の家宰太田資清とは、宝徳二年（一四五〇）四月、成氏の館を襲つた。成氏は江ノ島に逃れ、鎌倉方面では、千葉胤將等の軍が、長尾・太田の連合軍を痛撃したので、和議が成立、八月成氏は鎌倉に帰つた。

益々対立が激しくなる中で、享徳三年（一四五四）二月、鎌倉の成氏は、結城・武田・里見・印東の諸將に命じ、管領上杉憲忠の西御門の館を襲はせた。不意を突かれた憲忠は、あえない最後を遂げた。

これ以後上杉氏は、成氏と敵対関係に入り、関東の諸將は利害関係に依り、双方に分れて永く戦乱が続く事になる。

千葉氏一族は、成氏を支援して各地に転戦した。幕府は、今川範忠に命じ成氏討伐の軍を起させた。康正元年（一四五五）六月、範忠軍は鎌倉に乱入、敗れた成氏は下総古河城に逃れ、この地を根拠とするに及び、以後古河公方と稱した。

千葉胤直の死

千葉氏一族は、次第に家々が独立する様になり、本宗家である千葉介の權威が色あせて来たが、それでも千葉介は、各家々の勢力の均衡の上に立ち、伝統的權威を保つ事に努めて、活動を続けた。

千葉介胤直の老臣、原越後守胤房と円城寺下野守俊正の二人は、千葉氏内部の実力者であるが、互いに勢力を

争つた。原は、古河公方成氏を、円城寺は両上杉を背景にして、胤直を味方に引入れ様と策動し、実権は重臣の手に移り、胤直はロポットに過ぎなくなつた。始め、胤直は鎌倉公方持氏を支持し、永享の乱には上杉氏に属して鎌倉府滅亡の主力となり、成氏が関東の主となると、之に属し、重臣同志、原・円城寺の対立で内紛が激化するに及び、古河公方成氏に背いて両上杉の側面に立ち、円城寺の支持をする事となる。

馬加城主（葛張市）馬加康胤は、胤直の叔父で古河公方を支持していた。康胤は、この様な府甲斐無き胤直の動向を見て、之を滅ぼして千葉介を我が子に継承させ様と兵を挙げた。

康正元年（享徳四年一四五五）三月、原胤房の兵が千葉城を襲つた。胤直とその子胤宜は、敗れて千田荘（香取郡多胡町）に逃れ、胤直は志摩城・胤宜は多胡城に拠つた。原胤房は志摩城を、馬加康胤は多胡城を攻め、八月両城は陥ち、子胤宜は自害、父胤直は土橋の東禅寺境内如来堂に入り、弟胤賢と共に自害して果てた。

馬加康胤は、胤直にvari千葉介となつた。一方上杉方では、胤直の子実胤・自胤を助けて、市川城（市川市国府台）を与えて、千葉氏を再興させた。

これ以後千葉氏は、上杉氏を背景とする実胤・自胤と古河公方成氏方の馬加康胤との二つに分かれて争う事となり、益々衰退する事となる。

この間に安房に里見、上総に武田の新勢力が台頭して来て、それぞれに国内の他勢力を駆逐して統一した。

千葉氏の内紛

千葉六党の一つ、東氏は、承久の変の時、常胤の孫胤行が功を立て、美濃国郡上郡山田荘を賜はり、子孫が美

▼千葉寺



千葉寺



千葉常胤像（下巻四十一頁）

千葉常胤の像

濃を本拠とした。
東常緑は、二条派の歌人であり当時京都に住んでいたが、下総国における千葉氏宗家の紛争を耳にして心を痛め、將軍義政より御教書を賜はり、下総国東庄に下向した。下総に付いた東常緑は、関分・大須賀・相馬の諸將を始め下総国中の兵を動員、康正元年（一四五五）十一月、馬加城を痛撃した。馬加康胤等は敗れて千葉方面に退却した。常緑の軍は尚追撃して、上総の諸城をも制圧し、翌康正二年十一月に、上総八幡（市原市八幡町）に追い詰め、康胤は敗死した。古河公方方の勢力が撃退された。

一方古河公方成氏は、梁田氏等の兵を以て、原氏を支援して、康正二年正月、市川城を攻撃させて落した。そこで実胤は、武蔵石浜城（東京都台東区）に拠して武蔵千葉介となり、自胤は、赤塚城（東京都豊島区）に拠つた。実胤は、寛正三年（一四六二）頃、出家して美濃国に隠退したので、自胤が千葉介を継承した。

常緑は、応仁の乱が京都で始まったので京へ引揚げた。これにより房総の勢力分野に変化が生じ、北総の千葉氏は、足利成氏の援にて市川城・臼井城に拠し、武蔵千葉氏は、上杉方で石浜・赤塚城に後退して対立、安房では里見が統一、上総も又武田が一國を押領した。武田信長の娘は里見義実嫁しているの、両者は親しい間柄であつた。

成氏古河を逃れる

文明三年（一四七一）三月、古河公方成氏は、相州箱根山を越えて伊豆に侵入した。成氏に対抗させる為、將軍義政は弟政知を関東に下向させ、伊豆惣越に居つたの

、堀越三方と称したが、成氏は之を攻めるべく出張したのである。然し、政知を応援して派遣した山内顕定の軍に敗れて、古河に逃げ帰った。続いて長尾景信の大軍は古河城を攻め落した。同六月成氏は、下総に逃れ千葉孝胤（馬加康胤の子）に匿われた。孝胤は父康胤、敗死後、荒廃した千葉城を離れて佐倉（将門山）に居を移して来た。この時の成氏の居館は、香取郡多胡町御所台であった。



千葉猪鼻城本丸の土塁

成氏古河城回復す

文明四年（一四七二）三月、成氏は安房の里見義実・上総真理谷城主武田信高・長子信興、弟市南城主道信等武田の面々、下総の結城氏、下総千葉一族、関宿梁田氏那須、佐々木等の諸氏も加えて、上杉氏に当り、再び勢力を盛り返して成氏は古河城主となつた。

文明十年（一四七八）正月、関宿梁田政信の仲介で、足利成氏と両上杉との間に和議が成立した。

太田道罐の臼井城攻め

千葉孝胤（成氏方）は、武蔵千葉介自胤（上杉方）と反目している。この和議に反対した。扇谷上杉の家宰太田道罐は成氏の承諾を得て、文明十年孝胤攻撃の兵を出し、下総国府台城（市川市国府）に陣を構えた。孝胤は道灌の軍と境根原（松戸市小金）で戦い、原・木内等が討死し、敗れて臼井城に敗退した。

翌文明十一年正月、道灌の弟太田資忠（図書養子）と千葉介自胤の兵は、臼井城を攻めたが落ちず、自胤は兵を上総に移し、市南真理谷両城を攻め、七月両武田氏は降伏した。又この時飯沼城主（銚子市）の海上師胤も降伏した。

一方臼井城も孝胤勢が城より討て出たので激戦となり城に攻め入る時、資忠は討死したが城は落城した。孝胤は多胡城に逃れた。

今、臼井城二の丸前の曲輪に太田図書資忠の墓が建てられている。

千葉介自胤は、ほぼ両総を抑えて武蔵石浜城に引掛けたが、その後孝胤は、佐倉より出撃して臼井城を奪回したが、再び武蔵を窺う事がなかつた。

千葉神社

千葉駅の東約一軒、国道十六号線沿いにある。もと北斗山金剛授寺という真言宗の寺であったが、明治初年の神仏分離で千葉神社と改称、同七年景社に左つた。一般に「妙見様」の呼び名で親しまれている。

開基の年代は古く、大治二年（一一七二）千葉宗重が、上総国大椎郷から妙見菩薩を奉安し、一寺を建立したので始まりと伝える。

千葉氏は、祖先の平良文が妙見菩薩の靈験に

助けられて、平将門の乱に勝つたというの

、城内にかならず妙見菩薩をまつつた。

以来、中世を通じて千葉氏累代の祈願所とし

て栄え、今も神社では、千葉氏の紋所であつ

た月星、九曜紋を神紋として用いている。

千葉氏は天正十八年（一五九〇）小田原の役

で、北条氏と共に滅んだが、かわつて関東の

太守となつた徳川家康も深く篤信し、寺領二

百石を与え、左として厚く保護した。

拝殿の欄間の彫刻は信州諏訪の名匠、立川和

四郎富昌の作である。

千葉せん葉よう寺じ (海上山青蓮千葉寺)

亥鼻公園の南約一料、大網街道沿いにある真

言宗豊山派の寺、坂東三十三カ所霊場の二十

九番札所で、元明天皇の和銅二年(七〇九)

行基が池田郷(現千葉市附近)で仏像を刻み

、一堂を建てて安置したのが始まりという。

市内最古の仏跡とされている。

平安末期から室町時代にかけて、千葉氏の氏

寺として尊信を集め、建久三年(一一九二)

には、千葉常胤が頼朝の命で弘法大師作の不

勤明王、運慶作の愛染明王、錦の御戸帳おとすまうなどを寄信したと伝えられる。

近世には、徳川幕府から寺領一〇〇石の寄進をうけ、朱印寺として栄えた。

境内は約八、六〇〇平方米、仁王門をくぐって石畳の参道の正面に本堂があるが、これは昭和二十年七月の戦災で焼けたり、再建されたものである。他に明治元年に建てられた講

堂、文政年間（一八一八—一八三〇）造営の大師堂、仁王門、鐘堂などがある。

本堂と仁王門の間、参道わきにギビエ子銀杏いんぎょうの巨木は、県指定の天然記念物で、目通り幹廻り八米、樹高約三十米、樹齡は不明だが、寺が開かれた和銅年間（七〇八〜七一四）に植えられたものといわれ、古い寺歴を物語っている。

明治四十三年一月、門前の民家の庭先から発見された鑄銅梅竹文透釣灯笼は、国指定の重要文化財で、笠の上には千葉寺愛染堂天文

十九年（一五五〇）七月十八日の銘がある

。複雑な文様・形姿を薄手に、しかも扉以外の部分を一つの型で鋳上げるといふ、優れた鋳造技術を示している。現在、東京国立博物館に寄託されている。

また寺域内には、寺の由緒を物語る鐘倉（南北朝期の多宝塔ニ基、室町時代の多層塔、中興の僧空山上人のために建てた天正十年（一五八二）在銘の五輪塔、新滝記念塔、布施丹後君遣徳之碑など、多くの古石塔類が遺存している。新滝記念塔は、千害下ササしむ付近の

農民を救うため、慶長十八年（一六一三）現在
の千葉市仁戸名町関場には、都川の支流を象
め、私財を投じて灌漑用の矢作堰を構築した
豪農、布施丹後守常長が寛永二年（一六二五）
に建てたものである。用水路は堰から千葉
城の下をまわり、南へ延びて稻荷町と今井町
あたりの水田をうるおしていたが、近年の都
市化によつて昔の面影はほとんど失われ
てしまつてゐる。

千葉城跡

千葉聚の南東約一軒、市街地に向かして張り
出た海拔二十米余りの亥鼻丘陵の突端にある
。亥鼻城ともいい、大治元年（一一二六）千
葉常重の築城と伝えられている。
千葉氏は、平高望の四男良文を祖とし、平安
中期ごろから現市土気町の大権城に拠り、西
総地方に威を張っていたといわれる。「エー
ガイニ」と呼ばれる大権城跡には、今も土塁
や空堀の一部が遺存している。

千葉城を築いた常重は、良文の六代目の孫と
されてゐる。

千葉氏の全盛期は、二代常胤の時代である。

常胤は常重の長男として元永元年（一一八八

）大権城に生まれ、のち父と共に千葉城に移

つた。平家専横の世に生きてが、治承四年（

一一八〇）頼朝が序総の地で再起をはかつた

とき、六十三才だった常胤は、千葉一族を結

集させて頼朝を助け、平氏を追つて長門塩の

浦方面にまで転戦して戦功を挙げ、鎌倉幕府

の創設に大きく貢献した。

頼朝かろ”才二の父”と仰がれるほどの信任

を得、正治三年(一一二〇)歿した。

千葉城の城下町は、表千軒、裏千軒などと呼ば

せられ、賑を極めたといふが、十三代胤直の康

正元年(一一四五)三月、一族の馬加城(市

内幕(所用)主、馬加康胤と家臣、原胤房の反

乱(二回)、城は焼かれ、胤直、胤宣父子は干

田主(香取郡多古町)に逃れ、胤直は志摩(城

に、胤宣は多古(城)に拠つた。しかし同年八月

志保城が原氏の、多古城が馬加氏まじかりの攻撃を受け、
受け、落城、胤宣は自害、胤直は弟の胤賢と
ともに土橋の如素堂（多古町、寺作東禪寺内）
へに入り、自刃して果てた。
このあと馬加氏が千葉介の名跡を継いだか、
以後千葉氏は衰退の一途をたどった。
現在城跡一帯は、亥鼻公園、文化の森とされ
ており、日本庭園や千葉市郷土館、文化会館
、図書館などが設けられている。
またこの一帯は桜の木が多く、花期の四月上

旬には観光桜まつりか催される。

城の遺構はほとんど残っていないが、北側は

叡川が自然の水堀をなし、西は断崖、南は細

長い侵蝕谷、東方は台地つゞきで、入りくん

だ。小さな谷を空堀としている。

内郭は、千葉市郷土館の裏手から亥鼻公園を

含む地域で、公園中央に遺存する土塁で囲ま

れたところが本丸跡である。この北西の神明

神社付近に物見櫓があり、外郭の東端にあた

る、千葉大学整形外科病棟の門前あたりに大

手口があつたと推定される。

お茶の水

本丸の土塁から北西へ坂を下り、国道一＝六号線（東金街道）へ出る手前には不動堂がある。このおきにはお茶の水と呼ぶ泉が湧いてゐる。この泉は、千葉常胤が頼朝を城に迎えた際、この水でお茶をたてたといわれ、この名がある。また平良文の子忠頼が生まれたとすき、水がわき出したともいい、千葉家では代

々、この水を産湯水に使い、出生した子供の
武軍長久を祈ったとも伝えられている。
現在、湧水は止まり、水道の水を出して昔の
面影を残している。

七天王塚

公園の東了、千葉大学医学部付属病院の構内
には、「七天王塚」と杯される七つの塚が、
北斗七星のように点在している。千葉氏は、
妙見神、すなわち北斗七星を氏神とし、月星

九曜紋を家紋とする豪族であった。七曜、
九曜といつた星辰紋は、カサヤ弓箭を保護する仏天
として、妙見菩薩信仰の対象とされる軍の神
である。
これとは別に七天王塚は、千葉氏が同じ平高
望を祖とし、天慶の乱に滅びた平将門の霊を
慰めるために建てた、七騎武者の墓だと
もいわれている。七騎武者には、将門と六人
の騎武者、あるいは六人の兄弟、六人の協力
者という三つの説が伝わっている。ともあか

、千葉式時代をしのばせる遺構の一つとされて
いる。

千葉市郷土館

亥鼻公園内東寄りにある。鉄筋コンクリート
造り、四層五階の天宇閣で、昭和四十二年に
建てたものであるが、もちろん千葉式の時代
にはこのような天宇閣をもつた城はなく、居
館程度のものしかなかつたものと思われた。

館内三階には、千葉常胤の本彫がある。これ

は現代の彫刻家、安西順一氏が中世の服装を参考とし、北条時頼像（鎌倉建長寺）と上杉重房像（鎌倉明月院）をモデルとして氏が創作したものである。

大日寺

千葉市内の北寄り、西千葉駅に近い千葉大学の東側にある真言宗豊山派の寺。

正式には阿毘盧山密乘院大日寺といひ、今次大戦前までは千葉神社のわきにありた。

寺仏によると、天平年間（七二九〜七四九）
孝徳天皇の勅命により、藤原家節が仁生法師
を開基として、千葉の海岸ベリの丘に一宇を
建立したので始まりといわれる。

平安末期以後は千葉氏累代の菩提所とされ、
寺運は隆盛。「鎌倉大草紙」にも、康正元年
（一一四五）八月、千葉胤直ら一族が多古町
で滅亡したとき、火葬にして当寺に埋め、五
輪の石塔を建てたなどと記されている。

現在境内には、三基の多層石塔と二十三基の

五輪石塔があり、これが千葉家累代の墓とい
われているが、いづれも無銘で、どれが誰の
墓か知るよすがもない。

寺宝として安元二年(一一七六)三代胤正の
夫人が男の子を生んだお礼に寄せたという、

「日月星三光の御鏡」が残っている。

來迎寺

道路をはさんで大日寺の南側に、浄土宗來迎
寺がある。來迎寺には、千葉胤胤、満胤らの

鎌倉後期、室町初期の五輪石塔七基、寺の
二世住職、伏見宮尊空法親王の無縫塔などが
遺存している。

五輪石塔のうち、千葉清胤のものは清胤没後

、百力日供養にたてたいわれ、「平清胤弥勒阿弥

陀仏、志永卅二九月十三」ときざまれてい

千葉常胤のひと

福田豊彦フはも

千葉常胤は、巨大な私営田領主フはも、兵、平忠常

の子孫として、関東の一角下総に生をうけた

。しかし彼が生まれた時代は、関東における

澆漑たる開墾の時代、在地領主フはも、武士の成立

の時代であつた。彼はその一員として、若い

時期から所領の開発に努め、所領確保の労苦

を重ねた。そしてこの在地領主フはも、武士の政權

、鎌倉幕府の創設に努め、これによつて子

孫義美の基礎を築いた。彼はまさに関東の在

地領主リ、武士の、そして鎌倉幕府の御家人の
一つの典型である。

彼を典型とするような在地領主たちの努力を
抜きにして、今日の千葉はあり得ない。

その意味で彼は、今日の千葉県、千葉市の祖
であるということができる。彼の彫刻が、千
葉発展の未来を示す御土館に飾られてい
ることは、誠に適切であろう。

常胤は誠実、素朴な関東武士であり、その生
活は質素であった。彼は生前から富裕な大名

として聞こえていたが、それは彼の努力と純朴な生活態度とによるものであった。

千葉介は江戸時代に民衆に広く読まれた黄表紙類にも登場するが、後世には特にこの富然たる大名という側面がもて囃され、これが彼の人物像を構成してゐるように見える。

その点で一番大きな影響を与えたものは、室町中期に作られた『曾我物語』であつたろう。周知のようによれば、曾我兄弟の仇討をめぐる苦難、悲劇の伝記的物語で、浄瑠璃、歌舞

伎や草双紙など、広く芸能、文学の原典とな
り、後世に大きな影響を与えたのである。
この物語には、富士の狩場に並ぶたつ屋形の中
でも際立つたものとして常胤と子息たちの屋
形が数えあげられ、その大きな左屋形の前を通
つた兄弟が、数十人の警固の武士に取り囲ま
れたことになっている。

蕪村の左の句はこれをよんだものである。

千葉どのの役屋引ケたり枯尾花

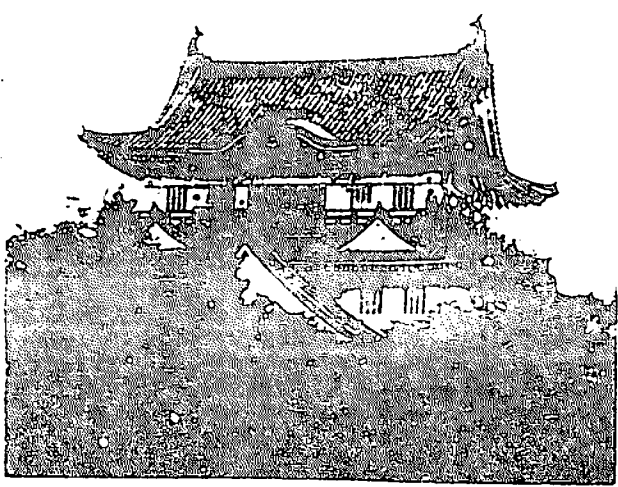
この句と同じく蕪村の勇壮な次の句は、江戸

三三の常胤像が代表されて、い子のひはなかろ

うか。

きじ啼や草の武蔵の八平氏

燕村



千葉城天守閣（郷土館）

千葉城

千葉市野鼻公園

源頼朝の四天王の一人であった千葉氏の城郭は、現在の千葉市の中央にある海拔約三十メートルの猪鼻山にあって、千葉城とも猪鼻城ともいった。

この天険の要害に居館をかまえ、周囲を土塁でかこむといった中世式の城郭で、昔はその付近は東京湾にのぞんで、西は断崖絶壁、北は都川が流れて自然の堀となっていた。東と西は台地つづきで、その間に深い谷があって空堀の役目をしている要害であった。本丸は丘の西北隅にあって、土塁でめぐらされ、周囲は五百メートルあまり、東南には空堀が構えられていた。

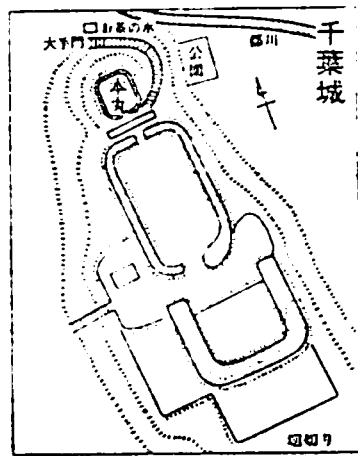
この地に城を築いた千葉氏というのは、平家の一族であるが、忠常のとき千葉を根拠地として、猪鼻山に居館をつくり、千葉氏を称した。しかし、史上に千葉氏の名称が現われ出したのは、忠常の子常将のときで、千葉介となり、代々千葉介を名乗った。その後、館は軋々としてかわり、四代目の常重のとき猪鼻山に、城を築いて移った。時に大治元年（一一二六）六月。これが猪鼻城の始まりである。

城郭は、縦横に多くの堀をつくってあった。大手はかなり急な坂道で石垣で組み上げているが、ほかは空堀まで土手で築きあげてあった。空堀の跡はいまも窪地になって残っているが、曲折する大手の坂を登ると、丘陵の西北端に本丸があったらしい。現在は小さな社があるだけだが、ここが見張所兼本丸になっていたところである。そこから南へ下るとかなり広い平坦な台地があり、当時は屋形

があったところで、見晴しが非常によい。昔は西方は東京、北と東は低地で一キロあまりはなれたところの丘陵がわずかに見えるだけだった。現在は千葉市内が一望に見下ろせる。

さて猪鼻城が完成すると、城下には人が集まって大変にぎわったことは、『千学集』に記されている。

これから千葉氏は武威を振うようになったのだが、全盛期は常重の子常胤のころである。治承四年（一一八〇）、伊豆に兵を挙げた



頼朝は、敗れてこの地で雄伏し、各地の豪族に呼びかけを行なった。そのとき、千葉介常胤が馳せ参じた。

これがもとで房総一円の武士団はこぞって頼朝に味方することになったという。

現在、城址の大手門跡に「お茶の水」という旧蹟があるが、これは頼朝を下総に迎えたとき、茶を接待したところであるという。頼朝はこれを大いに徳として、幕府を鎌倉に開くとかれを重用した。そして常胤の六人の男子には、それぞれ下総各地に城を構えさせた。これがいわゆる千葉六党である。いざというときには六人が力をあわせて敵に立ち向かったので、その地盤はますます強固なものになっていった。

ところが、時代が流れて常胤から十代後の満胤のころになると、この千葉六党の結束も乱れはじめた。すなわち千葉公第十四代の城主満胤に四子があった。長子の兼胤には家督をゆずり、二子の康胤は常陸の大掾殿へ養子にやった。ところが康胤は、大掾殿に実子が

生まれたので、猪鼻城へ帰ってきた。たまたま幕張の馬加城（現在の千葉市幕張町馬加）に城主がなかったので、満胤は所領を分配してかれを馬加城主とした。しかし、康胤は分家の冷飯は不満でたまらなかつた。折あらば一旗あげてやろうと闘志を燃やしていた。

まもなく、猪鼻城は兼胤から長子の胤直に移った。また関八州には足利成氏と上杉房頭の大勢力が対立し一触即発の危機をはらんでいた。この中に立たされた猪鼻城はけっしてのどかではなかつた。たまたま武州分倍河原で足利成氏と上杉房頭のあいだに戦端がひらかれ、足利軍が上杉軍を破つたのを見た胤直の権臣原胤房はこのときとばかりに足利成氏の援兵と馬加康胤を総大将にする軍勢で、猪鼻城を襲撃したのである。馬加康胤もこの機会を利用して本家を棄つ取るため、庚正元年（一四五五）三月二十日の夜陰にまぎれ、猪鼻城へ大挙押し寄せた。城兵たちは必死に抗戦した。その間に、重臣円城寺尚任は城主胤直の妻子をつれて多古城へ逃がれた。また胤直、胤將ら父子も多古城へ亡命しさらに志摩城へ拠つたり、各地を転々した末、八月十五日に一党ごとく自害して果てた。そこで宿願を達した康胤は猪鼻城へ入り第十七代千葉介となつた。一方上杉派では実胤、白胤（胤直の側室の子で兄賢胤の遺児）の二人を市川城に入れ、千葉宗家の回復を図つたが、康胤の勢力が強く機会がやゝてこぬうちに千葉氏は二派に分かれてしまつた。

さて、このころ足利義政は、千葉氏一族で美濃国郡上八幡城主の東下野守常縁に「康胤を追い実胤を猪鼻城主にすべし」と命じてきた。東常縁は六代千葉常胤の六男で、千葉六党の一人園分城主の胤頼の嫡流である。常縁はさつそく三万の兵を率いて下総の国に下り、馬加城を攻めたが落城しなかつた。そこで千葉六党の末孫たちを味方に加え、ふたたび猛攻撃を加えたから、さしも難攻不落を誇つた馬加城も落ちた。このとき猪鼻城にいた康胤父子も、猪鼻城の

落城も追つたと知り庚正二年十一月一日、搦手から抜け出して千葉寺を通つて上総の八幡に逃がれた。しかし追手が急で激戦の末、康胤父子は八幡を流れる藤田川の岸辺の林間で首級を挙げられてしまつた。

東常縁が美濃へ帰つたのは、それから十三年後の文明元年（一四七〇）二月であつた。ところが千葉氏宗家を継いだ実胤は根拠地である市川城が上杉成氏に攻められ落城したので、実胤は武州石浜城に、自胤は赤塚城に移つた。

その後の千葉介は康胤の第三子輔胤が継ぎ、猪鼻城を廃して佐倉の将門山に居城を移し、代々千葉介を称して、相模の北条氏に属したが、天正十八年（一五九〇）七月豊臣秀吉の小田原攻めるときに滅亡して、名門千葉介は絶えた。

（泰山哲之）

「千葉氏累世此城に居る按九代後記以此城。源頼朝之時其先千葉介常胤始て本国之守護に補せられ、子孫相襲て此に居る。文明三年

足利成氏時居古河城上杉頼定か為に破られ走て此城に入る。城主千葉陸奥守康胤迎へて是を守護しける見九代。永禄中千葉介胤相襲

て是に居り北条氏に属す見小田。天正十三年千葉新助都胤都胤初称栗飯原久四郎按国都国調通与小田原記。其臣桑田万五郎所繼胤胤蓋一人也然無此明証今各異三回文

のために弑せらる。其子幼稚成ニよつて此旨北条へ申けれハ氏政の不知にて、当城をハ小田原より持ノ其子二歳に成とも又新介と

称して当城に居住し家臣等後見して有りけるが、其年の冬証人として小田原にそ置ける。十八年神祖諸將を遣ハしてこれをせめ給ひしかハ此城遂に明退ける」。

興国元年ニハ師冬此城に拠ル。四月源頼信攻て是をやふりしかハ師冬城を焼て逃ル」。

『諸國廢城考卷之十六・千葉城』

参考資料

武蔵武士

埼玉県立博物館

千葉県の歴史

小笠原長和
川村 優

共著 (山川出版社)

千葉県の歴史散歩

千葉県高等学校教員教育
研究会 歴史部会

()

千葉市風土記

小笠原長和 他

(千葉日報社)

千葉常胤

福田豊彦 著

吉川弘文館

越谷市郷土研究会

理事 中村忠夫

阪東第廿九番札所下總國千葉市

海上山千葉寺

千葉寺略緣起

海上山 青蓮千葉寺略緣起 歡喜院

夫れ當山は、阪東拜所廿九番に當り、觀音薩埵遊花の靈地にして、行基菩薩草創の精舎なり、抑々其濫觴を探るに、往昔人皇四十三代元明天皇の清世、行基菩薩諸國遊化の際、當地池田の郷を過る時、池中に千葉青蓮一莖二花、大さ車輪の如くにして、金色の光明を放つあるを見、遂に、此邊りに一宿す、夜半慈々奇異の念斷へす然る間に彌陀觀音二尊來現し、告て曰はく、我等元一體而二也、西方に在ては彌陀と稱し、此土に現しては觀音と號す、便ち無量の慈悲を施し、無邊の衆生を利益せんと欲ふか故に來ると、其言了るや幻夢終に覺め、行基大に其靈感を誦し後ち和銅二年、行基復た此所に錫を留め以て該二尊の像影を彫み、之を一の精舎に安置し奉り、終に、其奇瑞を當時の人皇四十五代聖武天皇の御宇に奏聞す、玉體驚愕寂感不体、爰に伽藍を起し、僧坊を設け(本堂脇堂乃至三十六坊の造立)且つ額を三界六道を表し、號を海照山歡喜院青蓮千葉寺と勅し玉ふ、爾來湧々として、紫金の妙體玉殿に輝き、威德巍巍として、靈驗累世に喧し、廣湖の稻士、皆な憑を能救世間苦の盟誓に懸け、郷曲の道俗悉く愍を慈眼視象生の行願に凝し、參拜供養信施の徒、陸續として其跡を絶たず、地況を概せば、西は蒼海渺々として、弘誓の深きを表し東は翠山森々として、悲願の高きを示す、吁是れ山水錯綜、幽味殊勝の妙境と謂つべきなり、永歷元庚辰年某月某日、虛空に聲あり呼て曰く、雷火あり疾く尊影を移

し奉るべしと、寺僧等驚顔相告く忽ち電光目を射り、雷轟一聲轟然碎くか如く、麗て堂上を燬す、倏ち怪風扇動、化して一團の火勢と成り、亭々たる堂宇數多の並裝須叟に灰燼す、噫寔に惜むべき哉、于時この焰烟中物あり、鷹隼の如く飛て、西方八丁許りにある、老櫻の幹に移る、衆皆深く之を異し、就て是を觀れば觀音菩薩の頂上佛なり、(伏して惟れは佛天何の意ありて然る乎、是れ乃ち末去の下機を濟度し玉ふ所の善巧方便なる者歟)衆益々其威神力の、設入大火災不能燒等の一義、示現の程を具言感歎し、篤信の餘該櫻樹を肖像に刻み、且つ一字を建立す、即ち今の堂地是なり、後ち源賴朝公、大庭景親を相模石橋山に討つ、遂に利あらず、土肥三浦等の敗軍と安房に合し、且つ使を遣し安西景益、上總介廣常、千葉介常胤等を召す、常胤奏して曰く、事小に非ず、偏に佛天の冥誡を被らされは恐くは重ねて利あらずらんと、乃ち當山に詣て武運の不腹を祈り、且つ堂宇の再建を誓ふ、已にして武藏常陸等の軍兵、或は亂れ或は來て降んと請ふもの多く、終に年を出てすして天下の兇徒跡を絶つに至る、是れ即ち衆怨悉退散の本誓良に現證たる者なり、建久三年賴朝公、その嘗て誓願せる、再建の事を計畫し、常胤に命して土木の業を董し、其功を告るの際、莊嚴百具の資を給付し、以て盛に落成の典を舉ぐ、是れ觀音の妙智力に、淵源せるに外ならずと雖も、二公の偉徳、心願の精進力微りせは蓋し其成效を容易ならざるへし、於是二公の肖像も模造し、以て之を祭る、即ち今寒川驛の白幡神社と稱する神社なり、賴朝郷以來、世々將軍家、深く當山に皈依し當村高千石餘を寺領として、當山並に寺家十八箇寺、外寺役等へ配當せらる、又た永録十一辰年、千葉家十九代、胤富郷、深く祖蹟を追思し、海上の卿一圓を

寄進す、故を以て號を海上山と改む、物換り星移り、天正の年度に至り、一端寺領の奉還等ありて、寺格共に衰頹に屬し、加旃同六年に復火災の難あり、徳川家大に之を慨し、修造の資を賜ふ、殊には東照宮、天正十九年に、御朱印高百石を寺領とし以て永く後世の例規を定めらる、元録二年又復火災に罹り、當時常憲院、桂昌院の御前より、材木乃至金物等の下贈多きを以て、營造忽ち成る、文化八年又重て祝融の災あり、當山廿八世法印高照、該工事を有縁の信徒に圖り天保年中漸く其功を奏し結構壯麗稍や舊觀に復す、次て王政維新明治の二年に至り、先規寺領の奉還、境内上地等ありて、著しく供奉の資糧を欠き、舊觀の維持法を沮衷す、然りと雖も、皈依の信徒は日に月に増加の勢あり、特に小兒蟲封し祈禱は靈驗神の如く現はれ新四國八十八ヶ所弘法大師の御寶前には賽者雲の如く集る誠に以れば、觀音威神の力、福智二嚴、諸願成辨、實に之れ現在前せりと云爾、

因に聞ふ。觀音大士は能施無畏の誓ひ海よりも深く。普門慈眼の恵み。露よりも滋く之を仰く者は横災を攘ひ。之を念する者は願望を達す。就中。東西順禮の元起を尋ねるに。息諍王の詔に出て。佛眼上人の訓教に依て。花山法皇より終に尊卑當世の行業に覃ふ。誠に種々十罪。五逆消滅の禮文肝に染み。一切衆生。悉皆成佛の聖說眼に遮る。誰人か誠を此の尊に致さず。何輩か志を此場に投せざらん。信心禮敬の族らは。鎮へに長生殿の月に嘯き。同く寶樹林の花に吟し。永く退轉なからんのみ。南無皈命頂禮 大慈 大悲觀世音菩薩生々世々值遇頂禮